

# 『狭衣物語』の一品の宮と『源氏物語』の花散里をめぐつて

——身体的特徴と養母・後見人としての視点から——

塩 見 香 奈

はじめに

一条院一品の宮は、兄弟にあたる後一条帝の代に齋院を務めた後、狭衣と飛鳥井の女君の子である飛鳥井の姫君の養母・後見人となった女性であり、飛鳥井の姫君との縁をきっかけに狭衣と婚姻関係を結ぶことになる。しかし、その婚姻は互いに望まぬものであり、夫婦の間に生じた溝は狭衣の即位後や一品の宮の出家後も埋まることはなかった。

本稿では、齋院退下後の一品の宮の——狭衣の視点から描かれた「痩せ瘦せ」という身体的特徴や、〈養母・後見人〉としての在り方に注目すると共に、同じく身体的特徴として「痩せ瘦せ」が用いられており〈養母・後見人〉という役割を担っている、『源氏物語』の花散里との関係性についても確認していきたいと考えている。

## 一 一品の宮の容姿と身体的特徴

まず、一条院一品の宮の容姿や身体的特徴について確認していく。一条院一品の宮は、〈若さ〉か〈老い〉かというカテゴリーの中では〈老い〉に属し、盛りの過ぎた女性といった性質に近いように思われる。一品の宮の描写における〈老い〉に関しては、次の場面が挙げられる。

・卷三、一品の宮の容姿に対する狭衣の評。

さしも飽かぬ所なく、らうたげにうつくしかりし御ありさまをだに、なほ室の八島にはえ立ち並びたまはざらんと、せちに貶しめ思ひやりきこえたまひしも、御目慣ひにはことわりぞかし。

『新全集』②・一二二頁

この場面では、女二の宮の申し分なく美しい容姿でさえも「室の八島」——源氏宮には劣ると感じていたのだから、美しい女性たちを見慣れた狭衣から見れば、一品の宮の容姿が衰えたものと思うのも当然であると語られている。ここでは、狭衣が至上の女性とする源氏の宮を判断基準として、一品の宮を評していることがうかがえる。

その他に、源氏の宮と比較され、老いや盛りの過ぎた様子が示されるものとしては、卷三において結婚後の狭衣と一品の宮のやりとりを描いた場面があげられる。

・卷三、結婚後の狭衣と一条院一品の宮のやりとり。

げに御年のさばかりとこそ見えさせたまへと見えて、瘦せ瘦せにあてやかに、まみいと恥づかしげにらうらうじう、清げにおはしけり。

御髪さはらかに清げにて、丈に二尺ばかりや余らせたまひつらんと見ゆる、裾細らぎたまへり。香染の御衣どもに、青きが濃き薄き、吾亦紅の織物たてまつるも、いとどにほひなくすさまじき心地したまへるも、雪の朝にありし、斎院、枯野襲着たまへりし、御寝きたれ姿、めでたしと、御心に染みにしけにや、まづ思ひ出でられさせたまふ。

（『新全集』②・一一五—一一六頁）

一品の宮との結婚後、一条院での二人のやりとりが描写されている場面となっている。ここで狭衣は、地味な喪服姿であっても美しさを損なわなかった源氏の宮の様子を思い浮かべて、容姿の衰えた一品の宮と比較している。「雪の朝にありし」は、叔母にあたる皇太后宮の喪に服していた際の源氏の宮の、

皇太后宮の御形見の色にやつれさせたまひて、このごろの枯野の色なる御衣ども、濃き薄きなるに、同じ色のうちたる、われもかうの織物重なりたるなども、人の着たらばすさまじかりぬべきを、春の花秋の紅葉よりもなかなかまめかしう見ゆる、人がらなめりかし。ひきもつくろはせたまはぬ寝きたれ、御髪のかげれかりたる肩のわたりなど、なほなほさまことに見えさせたまふ。人々の、山作り騒ぐを御覧じて、うち笑ひうちとけさせたまへる愛敬、雪の光にもてはやされて、まことにあなめでたと見えさせたまへり。

（『新全集』①・二三九—二四〇頁）

という場面を指していることが『新全集』で指摘されている。<sup>(1)</sup>これら二つの場面の描写を比較すると、どちらも地味な衣装であることや、衣装に関する表現で「濃き薄き」という語が用いられているなどの共通点が見られるが、狭衣の両者に対する反応は大きく異なっている。一品の宮の描写からは、髪は美しいものの裾先が細っ

る等、やつれや衰えを感じさせる要素となっており、「香染の御衣」は、地味で見映えのしないもの、一品の宮の老いを際立たせるものと捉えられている。一方、源氏の宮の描写からは、豊かで美しい髪や、地味な喪服姿でありながらも損なわれることのない美しさ、声をあげて笑う可愛らしさなど、源氏の宮の若さ・美しさを際立たせるものとして表現されている。

また、「痩せ痩せに」という一品の宮の身体的特徴について、『新全集』では、「痩せ痩せ」「あて」「恥づかしげ」などは、『源氏物語』の宇治の大君の形容に通じるものがあるが、大君の「なつかしさ」を一品の宮は持たず、宮の「らうらうじ」さは、狭衣には心理的な距離として意識されている事が指摘されている<sup>(2)</sup>。

『源氏物語』の大君に関する描写のうち、一品の宮と同じく「痩せ痩せ」という語が用いられているのは、二例のみである。椎本巻において薫が姉妹を垣間見する場面、「紫の紙に書きたる経を片手に持ちたまへる手つき、かれよりも細さまさりて、痩せ痩せなるべし。」(『新全集』椎本巻⑤・二二八頁)と、総角巻において匂宮の来訪を喜ぶ女房たちを目にした大君の心内描写、「我もやうやう盛り過ぎぬる身ぞかし。鏡を見れば、痩せ痩せにもなりてゆく」(『新全集』総角⑤・二八〇頁)という場面である。椎本巻の場面は、父八の宮を喪った悲しみ故にやつれた大君の美しさが語られており、総角巻の場面では、衰えの兆候をみせるものとして痩せ細っていく身体を挙げているが、これは「大君の死の伏線と考える」もの<sup>(3)</sup>と

なっており、ここで用いられている「痩せ痩せ」の場合は衰えの象徴とするよりも、大君が衰弱し死が迫っていることの象徴として捉えるべきではないかと思われる。

同じ「痩せ痩せ」という語が用いられており、気品や美しさを感じさせる存在であっても、薫が惹かれてやまない大君の美質として用いられている「痩せ痩せ」と、狭衣にとっては源氏の宮、さらには嵯峨院の皇女達にも劣る存在として位置づけられている一条院一品の宮の「痩せ痩せ」では、語の受け取り方が異なっているように感じられる。語の表現については『源氏物語』の大君を参考にした可能性は十分に考えられるが、その語が用いられている女性に対する男性の評価は異なるものであった。作中における効果については『源氏物語』をそのまま踏襲しているわけではなく、『狭衣物語』独自の表現方法が展開されている事がうかがえる。

## 二 花散里の容姿と身体的特徴

『新編日本古典文学全集』の『源氏物語』において、「痩せ痩せ」の用例を確認したところ、先述した大君の描写を含め八例が確認できた。大君と同じように美質を示す語として用いられているのは、空蟬巻の空蟬・賢木巻の朧月夜・夕霧巻の落葉の宮の三例であり、例外は少女巻における大内記の貧しさを示す描写・同じく少女巻の花散里に対する夕霧の評・若菜下巻における柏木の病的な様を示す

描写の三例となっている。花散里の場合は『狭衣物語』の一品の宮と同じく容姿の衰え・盛りの過ぎた様について触れられている為、一連の場面について確認しておきたい。

ほのかになど見たてまつるにも、容貌のまほならずもおはしけるかな、かかる人をも人は思ひ棄てたまはざりけりなど、わがあながちにつらき人の御容貌を心にかけて恋しと思ふもあぢきなしや、心ばへのかやうにやはらかならむ人をこそあひ思はめと思ふ。また、向かひて見るかひなからんもいとほしげなり。

(中略)

大宮の容貌ことにおはしませど、まだきよらにおはし、ここにもしかにも、人は容貌よきものと目馴れたまへるを、もとよりすぐれざりける御容貌の、ややさだ過ぎたる心地して、痩せに御髪少ななるなどが、かくそしらはしきなりけり。

(『新全集』少女③・六七―六八頁)

花散里を夕霧の後見役に、という源氏の依頼によって二人が対面している場面となっており、夕霧は容姿ではなく彼女の気立ての良さを評価する源氏の在り方に感心しつつも、夕霧にとって身近な女性達と比べると、盛りが過ぎ容姿が劣る様を気にしていることがうかがえる。夕霧自身の恋愛対象としての目線ではなく、自分の後見人・父の恋愛対象としての目線となっている為、狭衣から見た一品

の宮への評と完全に一致するとは言えないが、他の女君と比較して容姿の衰え・盛りの過ぎた様を示す語として「痩せ痩せ」が用いられているという点においては、共通性が見出せるのではないだろうか。

『狭衣物語』の場合は、源氏の宮との比較として一品の宮の老い・盛りが過ぎた様が強調されているように思われるが、花散里の場合は、どのような意図でその容姿が描かれているのだろうか。少女巻の花散里に関する先行研究としては、夕霧の花散里評についてとりあげている武者小路辰子氏の論があげられる。武者小路氏は夕霧の視点から描かれた花散里の、妻・女性としての評価と光源氏の対応について、源氏の穏やかな言葉を用いた視点からははつきりしなかった花散里の持ち味の輪郭がようやく現れたと指摘している。また、花散里という女君は、作中の登場人物に強い影響を及ぼすこともなく、おだやかで平凡なさまが主に草子地や源氏、夕霧の視点から描かれるなど、彼女らしい話し方や動作といった特徴はほとんど問題にされないということも指摘されている<sup>(4)</sup>。

沢田正子氏は、花散里が二条東院に迎えられ、母儀として相応しい格式が整えられたこと、これまで言及されてきた花散里の優れた人間性が更に強調されていることや、かつての藤壺のように夫の息子に恋心を持たれるという設定を回避し、花散里が継母として純母性にのみ生きることが予告するといった現象は、すべて少女巻に

至つての夕霧の抬頭とともに新しく想定されたものであるとしている。花散里巻から朝顔巻にわたつて、少女巻以後の役割を予測させるような伏線はなく、左大臣家の庇護を受けている夕霧に対しての他者介入も考え難い状況であつた為、朝顔と少女の巻の間には明確な断絶を見てしかるべきであり、花散里は、当初から夕霧の母儀としての役割のみを担つて設定された作中人物ではなかつたと解釈している。<sup>(5)</sup> また沢田氏は、花散里は美や花やぎからかけ離れた様相を見せるのとひきかえるように、諸々の人間的価値の深まりを付与されてゆくこと。源氏と花散里の関わりは男女の愛の次元を超えたものであり、単なる醜女への同情や救済の趣ではなく、紫の上や秋好中宮を相手にした女性論の中でも必ず「ひむがしの御方」と、源氏自身との結びつきの所以を自認しているということも指摘している。<sup>(6)</sup> 森藤侃子氏は花散里が夕霧の母代になつた事について、源氏自身が藤壺に近づいた経験から、夕霧を紫の上の住む御殿から遠ざけているとして、花散里の醜貌は、夕霧母代として要請されたものであることがわかれると指摘している。<sup>(7)</sup> また、栗山元子氏は花散里の容姿について、

少女巻で花散里の負性として新たに語られた醜貌は、夕霧の観察を介在させることによって、やはり光源氏の「色好み」としての理想性を象るなかで利用されている一方でその限界が暴かれもし、光源氏の理想性に相対的な視線が投げかけられてもい

た。このような双方向性を内包しつつ、花散里とその床離れ・醜貌が語られてゆくのである。

と論じている。<sup>(8)</sup>

これらの先行研究の指摘のように、この少女巻の描写は花散里の醜貌を明確にした重要な場面と考えられる。その意図としては、夕霧を紫の上から遠ざけるため、<sup>(9)</sup> 継母として純母性にのみ生きること予告するため、<sup>(10)</sup> 光源氏の「色好み」としての理想性と醜貌によって床離れが生じるといった「色好み」の限界との両義性を示すため、<sup>(11)</sup> といった要素があると思われる。

〈母〉としての役割が重要視されている点、女性としての魅力は紫の上や藤壺といった女性たちよりも劣り、彼女たち以上の執着を示されることがないといった点において、花散里は『狭衣物語』の一品宮との類似性を感じさせる。しかし、光源氏が安らぎを感じている女性、そして母代としての役割を全うしている花散里に対し、一品宮の場合は狭衣と相容れない、冷え切つた夫婦仲であり、養女である飛鳥井の姫君に対しても、狭衣の実子だと気付いてからは積極的に関わりとうとはせず、母代としての役目を果たしているとは言い難いように感じられる。

その他に花散里の容姿について言及されている場面としては、初音巻・元日の描写があげられる。



今はあながちに近やかなる御ありさまもてなしきこえたまはざりけり。いと睦まじく、ありがたからむ妹背の契りばかり聞こえかはしたまふ。御几帳隔てたれど、すこし押しやりたまへば、またさておはす。縹はげにほひ多からぬあはひにて、御髪などもちたく盛り過ぎにけり。やさしき方にはあらねど、葡萄髪してぞつくろひたまふべき、我ならざらん人は見ざめしぬべき御ありさまを、かくて見るこそうれしく本意あれ、心軽き人の列にて、我に背きたまひなましかば、など御対面のをりには、まづわが御心の長さも、人の御心の重きをも、うれしく思ふやうなりと思しけり。

〔『新全集』初音③・一四六―一四七頁〕

これらの描写からは、源氏と花散里は男女の契りを交わす関係ではなくなっている事や、源氏の視点から花散里が盛りの過ぎた容姿である事などが語られている。他の男性であれば関心が薄れるであろう様子だが、そうした女性の世話をするのが嬉しいのだという源氏の心情は、少女巻において夕霧が語っていた「容貌のまほならずもおはしけるかな、かかる人をも人は思ひ棄てたまはざりけり」という描写と、重ね合わされているように思われる。

こうした少女巻・初音巻の描写について、助川幸逸郎氏は、

六条院夏の町の主人であり、源氏の須磨流謫以前からの恋人である女君の老いは、源氏自身にせまりつつある〈老い〉への連想を呼びおこす。そして、そのような連想を打ち消すかのよう

に、玉鬘十帖以降、源氏の若さを強調する条りが頻出する。<sup>(13)</sup>と指摘している。また、山上義実氏は、男女関係のない間柄・容貌の不備という点について、

光源氏を取り巻く妻達は、寵愛を競って相反目し対立することなく、紫上を中心に円満に安定していなければならなかった。男女関係のない妻という花散里像はその為に必要なだったのである。容姿容貌に恵まれ、明石姫君の実母であるにかかわらず、田舎育ちの受領階級の出身という身分故に最後まで紫上と対等の立場には立ち得ない明石君と同様に、花散里は容貌の不備という条件を与えられ紫上を脅かす存在には成り得ないのである。

と論じている。<sup>(14)</sup>

『狭衣物語』の場合は、正式に狭衣の妻という立場にあったのは一品の宮と藤壺（兵部卿宮の姫君）の二人のみとなっているが、彼女達は狭衣にとつての至上の女性である源氏の宮や、狭衣が執心している嵯峨院女二の宮と比較される立場にあった。山上氏の説をも

とに、再び『狭衣物語』における女性たちの関係性に目を向けてみると、一品の宮は高い身分・美質を有しているながらも、容姿の衰えを強調される事で、源氏の宮や嵯峨院女二の宮にとって代わる事の出来ない劣った存在として位置付けられるに至った、と考える事はできないだろうか。また一品の宮も、花散里と同じく男女関係のない間柄の妻という立場にあったことも注視しておきたい。

そして、一品の宮の場合はその役目を全うしているとは言い難いが、狭衣の娘である飛鳥井の姫君の養母・後見役という立場にあった事なども、夕霧・玉鬘の後見を担っていた花散里との関連性を考える上で重要ではないだろうか。花散里が玉鬘の後見を依頼された場面と、『狭衣物語』における一品の宮と飛鳥井の姫君の関係性について、さらに考察を深めていきたい。

### 三 〈養母・後見人〉としての一品の宮と花散里

続いて、〈養母・後見人〉という視点から、一条院一品の宮と花散里の関連性について確認していきたい。光源氏が花散里に玉鬘の後見を依頼した玉鬘巻の場面と、一品の宮が飛鳥井の姫君を引き取った事を常磐の尼君が狭衣に語る場面は、次のように描かれている。

①、玉鬘巻、源氏が花散里に玉鬘の後見を依頼する場面。

大臣、東の御方に聞こえたてまつりたまふ。「あはれと思ひし人の、もの倦じしてはかなき山里に隠れぬにけるを、幼き人のありしかば、年ごろも人知れず尋ねはべりしかども、え聞き出でなむ、女になるまで過ぎにけるを、おほえぬ方よりなむ聞きつけたる時だにとて、移ろはしはべるなり」とて、「母も亡くなりけり。中将を聞こえたるに、悪しくやはある。同じごとうしろみたまへ。山がつめきて生ひ出でたれば、鄙びたること多からむ。さるべく事にふれて教へたまへ」といこまやかに聞こえたまふ。「げに、かかる人のおはしけるを知りきこえざりけるよ。姫君の人ところものしたまふがさうざうしきに、よきことかな」と、おいらかにのたまふ。「かの親なりし人は、心なむありがたきまでよかりし。御心もうしろやすく思ひきこゆれば」などのたまふ。「つきづきしくうしろむ人なども、事多からでつれづれにはべるを、うれしかるべきことになむ」とのたまふ。

（『新全集』玉鬘③・一二七—一二八頁）

②、『狭衣物語』巻三、常磐の尼君が飛鳥井の姫君について語る場面。「……世に知らぬうつくしさと聞かせたまひて、一品の宮のいみじうゆかしがらせたまひしかば、百日の折に参らせたまへりしを、やがて留めきこえさせたまひて、乳母などあまたして思しめしかしづくさまなどは、いまおのづから聞かせたまひてん。

いとあはれに恋しうは思ひきこえながら、かかる山がつの垣はに生ひ出でたまはんも口惜しきを、いかがはせんずるなどぞ思したりし。宮にもなかなかなる知る人など出でて、知り顔に言はんなどぞ、忍びさせたまふめり」など言ふを聞くにも、さらに思ひ慰む方なう、いとかひなき中にも、なほこの忍ぶはかくて止むべき心地もしたまはず。

『新全集』卷三②・五九―六〇頁

兩作品を比較してみると、玉鬘と飛鳥井の姫君にはともに「山がつ」「生ひ出で」という語が用いられているという共通点を持ちつつ、夕顔と頭中将の間に生まれた玉鬘を実子として迎え入れようとする光源氏と、自身と飛鳥井の姫君の間に生まれた実子でありながらそれを隠そうとする狭衣という相違点が見られる。夕霧や玉鬘の養育者・後見人として源氏から信頼を寄せられている花散里とは立場が異なるが、一品の宮は、養育者としての評価は明確にされていないものの、一品の宮自身の代わりに弘徽殿の主として飛鳥井の姫君を参内させていることや、一品の宮の死後、飛鳥井の姫君が一品の宮の「形見」とされ、彼女と同じく一品を授けられることなどから、一品の宮も飛鳥井の姫君の養育者・後見人として重要な役目を担っていることがわかる。

なお、②の場面について『狭衣物語全註釈』では、

尼君が狭衣のお子を「兵衛の督の知るべきゆかり」と思い込んだのは、かつて狭衣が飛鳥井女君の乳母に自らを偽りそう思わせたためである。かつて、狭衣が女二の宮と契つたことを隠し通したために、子どもができたことも知らされずに自分の子となし得なかったように、ここでも同じようなことが起きていた。女二の宮の場合は、皇女という重い身分でありながら子を生むのを秘して、母である皇太后宮の若宮とされた。飛鳥井女君の場合は、身分の低さゆえに狭衣のお子にふさわしい境遇を与えることができず、一品の宮に我が子の行く末を委ねたのである。その子を恋い慕いながらも断念する飛鳥井女君の様子は、『源氏物語』で我が子を紫の上に託した、明石の君を念頭に置いて読むこともできる。巻四において、飛鳥井女君の遺墨による子との別れの様子はそのことを物語るが、飛鳥井女君は子の将来を見届けることもできずに亡くなったので、明石の君よりも哀れである。

と解釈されている。<sup>(15)</sup> 父親の素性が明らかにされなかった為に、若宮は嵯峨院と皇太后宮の子として、飛鳥井の姫君は藏人の少将と思われる男と飛鳥井の女君の子、さらには一品の宮の養女として扱われていく事になる。こうした、父親である狭衣の存在が明らかにされないとこの展開は、子供たちの立場や、子供たちの実母・養母の行く末にも密接に係わってくる要素であることがうかがえる。また、



娘の将来の為に自身の手もとに留めることを断念し、身分の高い女性に我が子を託すという飛鳥井の女君の在り方は、明石の姫君を紫の上に託した明石の君との関連性をうかがわせる。

次に、「山がつ」という語について理解を深める為、『源氏物語』の作中において、「山がつ」という語が用いられている場面——特に、子どもや養女に関する描写において用いられている場面について注目してみたい。

③、帚木巻・「雨夜の品定め」の夕顔の描写

「……さるうきことやあらむとも知らず、心には忘れずながら、消息などもせで久しくはべりしに、むげに思ひしをれて、心細かりければ、幼き者などもありしに思ひわづらひて、撫子の花を折りておこせたりし」とて涙ぐみたり。

「さて、その文の言葉は」と問ひたまへば、「いさや、ことなることもなかりきや。」

山がつの垣は荒るともをりをりにあはれはかけよ撫子の露

(中略)

大和撫子をばさしおきて、まづ塵をだになど親の心をとる。

『新全集』帚木①・八二頁

頭中將が夕顔から贈られてきた文について語る場面となっており、

夕顔の歌に「山がつ」が詠みこまれていて、玉鬘は「山がつの垣ほ」に生えている「撫子」に喩えられていることがわかる。この場面も①の場面と同様に、玉鬘と「山がつ」という語の結びつきが窺える。またその他に、玉鬘に関する場面において「山がつ」という語が使用されているのは以下の四例となっている。

④、玉鬘巻・源氏が玉鬘の様子を紫の上に語る場面。

めやすくものしたまふを、うれしく思ひて、上にも語りきこえたまふ。「さる山がつの中に年経たれば、いかにいとほしげならんと侮りしを、かへりて心恥づかしきまでなむ見ゆる。かかるものありと、いかで人に知らせて、兵部卿宮などの、この籬の内好ましうしたまふ心乱りにしがな。」

『新全集』玉鬘③・一三二頁

⑤、玉鬘巻・源氏が玉鬘に正月の衣装を贈る場面。

年の暮に御しつらひのこと、人々の御装束など、やむごとなき御列に思しおきてたる、かかりとも田舎びたることなどやと、山がつの方に侮り推しはかりきこえたまひて調じたるも、

『新全集』玉鬘③・一三四頁

⑥、常夏巻・源氏が玉鬘の実父頭中將について玉鬘に語る場面。

「なでしこのとこなつかしき色を見ばもとの垣根を人やたづ

ねむ

このことのわづらわしさにこそ、繭ごもりも心苦しう思ひきこゆれ」とのたまふ。君うち泣きて、

山がつの垣ほに生ひしなでしこのもの根ざしをたれかたづねん

はかなげに聞こえないたまへるさま、げにいとつかしく若やかなり。

〔新全集〕常夏③・二三三頁

⑦、常夏巻・頭中将が源氏が引き取ったという娘（玉鬘）について息子少将に語る場面。

「さかし。そこにこそは、年ごろ音にも聞こえぬ山がつの子迎へ取りて、ものめかしたつれ。をさをさ人の上もどきたまはぬ大臣の、このわたりのことは耳とどめてぞおとしめたまふや。これぞおぼえある心地しける」とのたまふ。

〔新全集〕常夏・二三六頁

④は光源氏が、先程対面した玉鬘の様子について母・夕顔の面影を残していることや教養のほどがうかがえることを紫の上に語る場面となっている。⑤は光源氏が玉鬘に正月の衣装を贈る場面となっており、源氏は玉鬘の容姿や教養は申し分ないと思っているが、装束に関しては田舎育ち故に垢抜けないところもあるだろう、と考え

ていることが語られている。⑥は玉鬘の実父である頭中将について光源氏と玉鬘が語る場面となっており、③に引用した夕顔と頭中将の歌をふまえたものとなっていることが窺えると共に、①の場面と同様に「山がつ」「生ひ」という二つの語が用いられている。⑦は光源氏が引き取ったという娘・玉鬘について頭中将が語る場面となっており、自身の子とは知らずに玉鬘を「音にも聞こえぬ山がつの子」と評している。

これらの場面から、玉鬘の性質を表現する際に「山がつ」という語が度々用いられていること、①や⑥のように「山がつ」と「生ひ」という語が併せて用いられているケースがあることが窺える。

こうした田舎・田舎人を示す語「山がつ」の語と玉鬘との関係性については、複数の先行研究で論じられている。津島昭宏氏は、消息を交わすなどして確かめた玉鬘の資質に源氏はある程度満足はしていたものの、文化的秩序が保たれた六条院という空間に「山がつ」という違和感をそののままの形で取り込むことができず、六条院の女君として「さるべく」養育するよう、花散里に依頼したとしている。

また、玉鬘はその処遇を誤ればすぐさま近江の君へと転移する危険を孕む山がつの子であることや、源氏はかつて須磨にあった自分を「山がつ」と称し、身分差も顧みずに自身を「山がつ」に近づけていったように、山がつの子である玉鬘も、積極的にその身に引き

寄せる——山がつの子であることを受け容れ、山がつの子であることを削ぎ落とす、光源氏はこの二つの間でなおも揺れ続ける、という<sup>(16)</sup>ことも津島氏によって指摘されている。

六条院という空間に「山がつ」という違和感をそのままの形で取り込む事は困難であり、「さるべく」——六条院の女君・光源氏の娘として相応しく養育する為に、玉鬘が養母・後見人の役割を担ったという津島氏の説をふまえると、『狭衣物語』の場合は、狭衣の实子でありながら「山がつ」という性質を付与された飛鳥井の姫君を狭衣の娘、さらには帝の娘として相応しく養育する為に、一品の宮という高貴な女性を姫君の養母にする必要があったと考えられないだろうか。

また、〈養母・後見人〉と姫君たちの関係性を語るにあたり、〈実母〉の存在にも注目する必要があると思われる。飛鳥井の姫君の実母である飛鳥井の女君と、玉鬘の実母である夕顔との関連性、そして『狭衣物語』と夕顔卷の関連性については、土岐武治氏の論など、複数の先行研究が確認できた。<sup>(17)</sup>その中でも、娘にあたる飛鳥井の姫君と玉鬘、さらにその養母（後見人）にあたる一品の宮と花散里についてふれているのは、土岐武治氏の論のみとなっている。<sup>(18)</sup>

土岐氏は、玉鬘が玉鬘巻において源氏の实子同様に扱われているとした上で、

夕顔・光源氏・玉鬘の関係と上に云ふ飛鳥井・狭衣・姫君の親子関係とは全く契合することにならう。しかも夕顔・飛鳥井の子供は共に姫君であり、その上夕顔も飛鳥井も陰の妻といふ共通面があり、更にこれら両女性の末路は、いづれも悲運の物語脚色となつてゐるところにも、著作上の因縁が窺はれる。

と、両作品の関連性について論じている。

また、土岐氏は、両作品とも飛鳥井と夕顔の四十九日の法要が営まれている事と、その際に形見の遣児について言及されている事を挙げている。そして、先述した①・玉鬘巻、源氏が花散里に玉鬘の後見を依頼する場面を引用し、『狭衣物語』においても狭衣が飛鳥井の姫君を世話したいばかりに一品の宮と結婚するようになる事を指摘した上で、狭衣の真意を知った一品宮は、それがために次第に苦しみ夫婦の仲は疎くなり、狭衣が姫君に対して袴着や裳着のお祝などのお世話をする辺も、源氏が玉鬘を寵愛する筆法と全く似通うことになる<sup>(19)</sup>とされている。土岐氏の説のように、今後は養女である飛鳥井の姫君と玉鬘、さらにはその実母である飛鳥井の女君と夕顔の関係性を通じて二人の関連性を見出していく、という方法も考えていきたい。

おわりに

以上のように、『狭衣物語』に登場する一条院一品の宮と、『源氏物語』の花散里の関連性を、容姿・身体的特徴や養母としての役割を中心に考察を行った。一品の宮と花散里は、「痩せ痩せ」という語や養母・後見人としての役割を担うといった類似性がうかがえる一方で、養子との繋がりが穏やかで良好な対人関係を築いていく事となった花散里と、養子との繋がりによって夫婦の間に大きな溝を作り出す事となった一品の宮、という相違点も生じていると考えられる。

一条院一品の宮という女性を形作る上で、花散里の老いや盛りの過ぎた様の象徴として使われた「痩せ痩せ」という言葉を用いる手法や、子どもの立場を補強・安定させる為の養母・後見としての役割、肉体的な関わりを持たない夫婦としての在り方などが、影響を与えていた可能性は見出せるのではないだろうか。

しかし、左大臣家の後ろ盾もあつたであろう夕霧や源氏の実子ではなかった玉鬘の養母となった花散里と、狭衣の実子であり、将来的に皇女となる飛鳥井の姫君の養母となった一品の宮では、子どもに及ぼす影響力に差があるようにも感じられる。花散里の場合は、六条院に住まう姫君としてふさわしい立場を整える、子供たちの後ろ盾を強化する、容姿の美醜ではなく気立ての良さを評価する価値観を与える、といった役割を担っている。一品の宮の場合も、狭衣の子としてふさわしい立場を整える、後ろ盾を強化するという役割そのものは花散里と共通しているが、身分の低い飛鳥井の女君の血

を引く姫君を、皇女の中でも最も身分の高い一品の宮という立場にまで押し上げるという展開は、他の女君たちには出来ない、一品の宮が養母・後見人となっているから可能となった描写であると考えられるからである。

また、一品の宮は花散里のように安らぎを与える妻ではなく、夫狭衣や養女である飛鳥井の姫君と距離を置き心を開かないなど、狭衣の心を悩ませる、思い通りにならない妻として描かれながらも、養女である飛鳥井の姫君の権威付けには深く影響を及ぼす役割を担っていることも注視しておく必要があると思われる。単に『源氏物語』の踏襲の象徴としてではなく、その先にある『狭衣物語』独自の手法・特徴を色濃く表したものととして一品の宮の物語が描かれているのだと捉えていきたい。

また、今回の考察に取り入れることができなかったが、先述した第三節の②・常磐の尼君が飛鳥井の姫君について語る場面において、『狭衣物語全註釈』では、

一品の宮と飛鳥井姫君の関係は、叔母洞院の上と今姫君の関係をずらしたものである。一品の宮の母の妹である洞院の上は、夫堀川大殿の子と思い込んで今姫君を養女に迎えた。一品の宮は、夫となる狭衣の子とは思わずに飛鳥井姫君を迎えていた。しかも、飛鳥井姫君の母と今姫君とは従姉妹同士の関係にある。養女の身元をよく確認せずに引き取った洞院の上の不注意さは、

一品の宮も同様である。けれども、物語は洞院の上とはまた違った一品の宮の人物像を、これから描き出そうとするのである。

と指摘されていることにも注意しておきたい。<sup>(20)</sup> 養女の身元をよく確認せずに引き取った養母としての性質は、光源氏が自身の子として玉鬘の養育を依頼し、養母の役割を担うことになった花散里にも通じるものがあるように思われるが、そうした側面から見えてくる両者の共通点・関係性についても、今後考察を深めていきたいと考えている。

#### 注

- (1) 『新編日本古典文学全集』下 (小町合照彦・後藤祥子校注、小学館、二〇〇一年) の頭注。
- (2) 『新編日本古典文学全集』下 (小町合照彦・後藤祥子校注、小学館、二〇〇一年) の頭注。
- (3) 『新編日本古典文学全集 源氏物語』(阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注、小学館、一九九六年) の頭注。
- (4) 武者小路辰子「花散里をたづねてぞとふ」(『日本文学』、一九六一年四月)。
- (5) 沢田正子「源氏物語における花散里の役割」(『言語と文芸』第六五号、一九六九年七月)。
- (6) 沢田正子「源氏物語の男女の容姿・服装」(『源氏物語研究集成』第十二卷、増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹編、風間書房、二〇〇〇年)。

- (7) 森藤侃子「光源氏と花散里―几帳ごしの夫婦」(『人文学報』第二二五号、東京都立大学人文学部編、一九九一年一月)。

- (8) 栗山元子「玉鬘十帖における花散里の醜貌と床離れについて―その両義的作用―」(『平安朝文学研究』復刊第五号、一九九六年十二月)。

- (9) 注(7)に同じ。

- (10) 注(5)に同じ。

- (11) 注(8)に同じ。

- (12) 容姿に関する詳しい描写はないが、光源氏と花散里の床離れについては、薄雲巻や蛭巻においても語られている。どちらの場面も、不満を抱く事なく床離れという現状を受け入れている花散里の姿が描かれていることがうかがえる。

#### 【薄雲巻】

近きしるしはこよなくて、のどかなる御暇のひまなどにはふと這ひ渡りなどしたまへど、夜たちとまりなどやうにわざとは見えたまはず。ただ御心ざまのおいらかにこめきて、かばかりの宿世なりける身にこそあらめと思ひなしつつ、ありがたきまうでうしろやすくのどかにものしたまへば、をりふしの御心おきてなども、こなたの御ありさまに劣るけぢめこよなからずもてなしたまひて、侮りきこゆべうはあらねば、同じごと人参仕うまつりて、なかなか乱れたるところなくめやすき御ありさまなり。

(『新全集』・薄雲②、四三八頁)

#### 【蛭巻】

今はただおほかたの御睦びにて、御座なども別々にて大殿



籠る。などかく離れそめしぞと殿は苦しがりたまふ。おほかた、何やかやとも側みきこえたまはで、

(中略)

「朝夕の隔であるやうなれど、かくて見たてまつるは心やすくこそあれ」と戯れ言なれど、のどやかにおはする人ざまなれば、静まりて聞こえなしたまふ。床をば譲りきこえたまひて、御几帳ひき隔てて大殿籠る。け近くなどあらむ筋をば、いと似げなかるべき筋に思ひ離れてはきこえたまへれば、あながちにも聞こえたまはず。

(『新全集』・螢③、二〇八―二〇九頁)

- (13) 助川幸逸郎「今めかし」という方法―光源氏世界の栄華と衰頹をめぐって―」(『国文学研究』一一三、一九九四年六月)。
- (14) 山上義実『源氏物語』における愛のかたち―花散里の場合―」(『金城大学論集 国文学編』四六、二〇〇三年)。
- (15) 『狭衣物語全註釈』V(狭衣物語研究会(豊島秀範・太田美知子・南昇・武内佑希・神田久義)編、おうふう、二〇一二年)。
- (16) 津島昭宏「光源氏と山がつ―玉鬘との関わりにふれて―」(『物語文学論究』一一、二〇〇一年)。
- (17) 土岐武治「源氏物語との交渉」(『狭衣物語の研究』、土岐武治著、風間書房、一九八二年)、星山健「『夕顔物語』から『飛鳥井女君物語』へ―『狭衣物語』における人物造型の方法―」(『中古文学』第五六号、一九九五年)、千原美沙子「飛鳥井と夕顔・浮舟」(『古典と現代』六九号、二〇〇一年)、今井久代「夕顔と飛鳥井の姫君」(『人物で読む『源氏物語』第八巻、西沢正史・上原作和編、二〇〇五年)など。
- (18) 土岐武治「源氏物語との交渉」(『狭衣物語の研究』、土岐武治著、風間書房、一九八二年)。
- (19) なお、この土岐氏の指摘をもとに飛鳥井母子に関わる『源氏物語』引用について論じているものとして、野村倫子「『狭衣物語』飛鳥井と一品の宮母子の物語―『源氏物語』引用を基点に―」(『立命館文学』六三〇、立命館大学人文学会編、二〇一三年三月)があげられる。野村氏は、源氏父子・狭衣父子の類似点と差異について、次のように論じている。
- 玉鬘の裳着と飛鳥井の姫君の袴着の儀式の準備について、実母と死別したのち実父との再会が叶わないまま他家の養女となり、世間が実の父親と認定するのに通過儀礼を手がかりにする点が共通する。ただし厳密に言えば、光源氏は養父、狭衣は実父であり、また養女として世話をする玉鬘をどういう形で実父内大臣に返すかを考える光源氏と、結婚相手の一品の宮に引き取られた実の娘を取り戻そうとする狭衣、という大きな差異がある。
- また野村氏は、光源氏の子ども達よりもさらに下位の母親から生まれた子ども達が、狭衣の子であることにより母の素性が消去され、皇族となるところに狭衣の超越性を支えるものを見るとき、源氏の皇統が冷泉院をもつて継承されずに兄朱雀院の皇統に回収されて正当な血統に戻ったのとはまったく異なる『狭衣物語』の皇統継承のあり方的一端を見ることができると結論付けている。
- こうした狭衣と光源氏の相違点や、『源氏物語』とは異なる『狭衣物語』独自の皇統継承のあり方といった点には同意であるが、狭衣の子であることにより「母の素性が消去される」と言い切ってもよいのかという疑問が生じる。

(20)

『狭衣物語全註釈』VI (狭衣物語研究会 (豊島秀範・太田美知子・南昇・大野藍子・野崎花菜・武内佑希・神田久義) 編、おうふう、二〇一二年)。

(しおみかな 大学院博士後期課程在学生)